



へら鮎

Monthly fishing magazine herabuna Contents

「へら鮎」の題字/叶 九隻

No.470
Feb.2005

2

特集

8 **夢の競演。岡田 清&小林恭之 in 椎の木湖**

特別企画

22 **森崎政典 2004関べら年間優勝インタビュー**

208 **こだわりの店「黒べゑ」提供 新春お年玉プレゼント!!**

165ページ

管理釣り場割引クーポン券がさらに増えました!

野田幸手園	椎の木湖	清遊湖
谷和原大沼	隼人大池	上尾園
F.A吉羽園	谷養魚場	将監
柳生FP	筑波白水湖	泉堰
逆井HC	友部湯崎湖	
水藻FC	甲南へらの池	

●今月の表紙●
angler: 岡田 清&小林恭之
field: _____
photo: 本誌・里
layout: 本誌・里

COLOR (カラー)

- | | |
|--|--|
| 28 名手・石井旭舟がいく、へら鮎出合い旅… へらぶな浪漫街道
《第二十五回》兵庫県 加古川 | 137 戸張 誠 野釣り道場
《第九回》【三島湖 鯨島周辺の底釣りポイント】 |
| 36 戦い続ける男、浅草へら鮎会、年間タイトルへの挑戦。小池忠教 激闘の軌跡
最終回 激闘を振り返る | 142 チョーテン王・田中雅司の深田興義伝承 魚心掌握
Vol.5【～寒期でも両ダンゴで釣れるのか～】筑波湖 |
| 42 杉山達也のSPLASH BEAT III
《Vol.9》地元・熊の池で激流攻略!! | 147 田辺哲男の「それってどーゆーことよ!?」
《Vol.25》富里乃堰、冬でもOKチャンピオンのスゴ技!
萩野孝之の【クイックレスポンスベレ底】!! |
| 49 棚網 久 あなたの夢を叶えます。
「私を無敵にしてください♡ その2」
ゲスト:村田雅美さん 釣り場:鬼怒川大自然 | 152 吉川ひとみの「へらってヤバイわっ!!」
《Vol.31》恐怖のコテコテ野釣り編 in印旛捷水路! |
| 55 平成16年度 吉羽園賞金大会 | 156 新連載 稲毛師匠と編集部諸が行く、ODEKO危険度120%
《第2回》園原ダム/みさと湖/草木ダム(群馬県) |
| 56 筑波湖8周年記念大会 | 160 新連載 私の宝物
《第1回》ゲスト:棚網 久さん |
| 57 2004NHCへらぶなトーナメント全国大会 | 193 本音で迫るへら用品インプレッション。へらアイテムメッタ斬り!
【ハリスピットリパート2】 夢釣工房 |
| ★AREA REPORT | 194 岡田 清 Deep Side Angle
《Vol.16》【両グル、苦悩の一日。】 将監 |
| 58,66 戸面原ダム(千葉県) 本誌・伊藤洋一 | 200 新連載 北川穂積の全国野釣り行脚
《第1回》吉野川・第十堰&旧吉野川(徳島県) |
| 60,68 河北潟(石川県) 山本一朗 | 204 釣りの帰りに寄りたのお店
《file.7》甚兵衛広沼、谷養魚場近く【いしばし】のうな重 |
| 61,69 ひだ池(愛知県) 後藤 誠 | 206 釣果予想クイズ |
| 62,70 当麻池(奈良県) 前田誠志 | |
| 63,71 四力所の新堀(福岡県) 河口正伸 | |
| 129 フィッシングレディ
《今月のレディ》手塚亜希さん 筑波白水湖(茨城県) | |
| 134 竹とともに生きる。
番外編 高野竹を求めて | |

MONOCHROME (モノクロ)

- | | |
|--|---|
| 72 新連載 へら鮎釣り 超基本講座
《第2回》1時間目 ウキの選び方、使い方の超基本 | 117 新連載 どやさー 今月の釣り場 西田美明
《その2》【甲南へらの池】 |
| 76 2時間目 段差の底釣り超基本 | 122 最狂へら戦士養成所「鮎の穴」 漢タカハシ
《第二十四話》【サンタが川にやって来る! 「へら鮎」100万人読者を幸せにせよ2】 |
| 78 3時間目 軽装で手軽に楽しめる釣り堀 弁天FC&大野園 | 126 野田幸手園新聞 |
| 83 新連載 あらいしのぶのなぜなぜしのちゃん
《第2回》【しのちゃん、底釣りで爆釣?】春日部GFC
教授:石井旭舟さん | 162 ワクワク管理釣り場情報 |
| 88 NHCスピリット
《Vol.17》2004NHCへらぶなトーナメント全国大会 清遊湖 | 169 小売店情報 |
| 92 トーナメント小林恭之が挑む! 竿頭までぶっ飛ばせ!!
《第14回》2004NHCへらぶなトーナメント全国大会(清遊湖) | ★へら鮎BOX |
| 99 江成公隆のトーナメント、復活への道。
《Vol.32》底釣りゼミ2005 PART I on Mac | 175 里ちゃんの新米編集長雑記 |
| 108 そんなモジリにダマされて… 天野正由
《その14》我が心の故郷 滋賀(永源寺ダム～多賀釣池～佐鳴湖) | 176 情報発信基地 |
| 114 水辺のプラネタリウム 吉本亜土
《今月の星空》「各部合同」 | 178 ボイス |
| | 185 柴舟主催 連至40周年記念懇親釣り大会 |
| | 186 最終回 コラム『夢中と書いて夢の中』 伝道師P |
| | 187 コラム『日研だより』 日研広報部長・遠藤克己 |
| | 188 コラム『へら狂おやじと呼ばないで』 白石和弘 |
| | 189 コラム『紀州「想いの竹」のものがたり』 中峯伸行 |
| | 190 プレゼント発表 |
| | 191 広告索引 |
| | 192 編集後記 |

STAFF

●Producer
根本百合子

●Editor in chief
田中里史

●Editor
大場勝良
諸富一秋
伊藤小百合
伊藤洋一

●Planner
〈オフィス・えび〉
藤原 肇



この物語は、
栄光、そして挫折を味わい、
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

江成公隆の トーナメント、 復活への道。

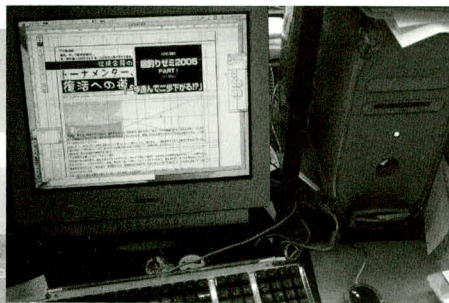
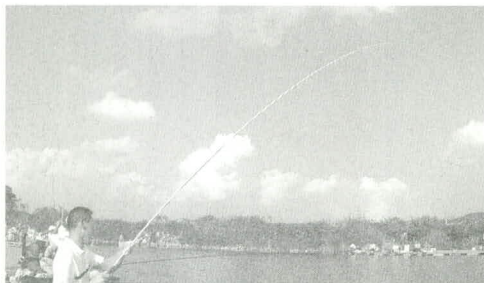
text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka
業界初、Web運動企画！〜のびが更新済中！ (URL) <http://hesar.yokohamatsurumi.net>

「一歩進んで二歩下がる!?!」

〈Vol.32〉

底釣りゼミ2005

PART I
on Mac



ようやく始まる「底釣りゼミ2005」。読者の皆さんのご期待通り、紛れもなく「あの」ゼミの続編である。その内容は、「ここまで考える必要があるの?」と、思えるほどコアなものとなっているが、読後、あなたの釣りはおそらく大きくは変わらない。二年前の「底釣りゼミ」ほどには。

だがしかし、間違いなく今回も前回のゼミと同じくらい「深い」。いや、深すぎる…。初心者だけでなく上級者のあなたでさえも、「読み飛ばして構わない。いや、読まなくても構わないかもしれない」と、最初に断っておきたい。

ではなぜ、そんな記事を掲載するのか?

「へら鮒釣りは難しいもの」だからである。

管理釣り場全盛の昨今、数ある釣りジャンルの中でも、初めての釣行で最初の一匹が釣れる可能性は極めて高く、「へら釣りは入りやすい釣り」と言えるだろう。事実、弊誌も「易しく釣る」というコンセプトのもと、数え切れないほどの特集を組んでいる。業界の立場で言えば、「底辺拡大・新規参入」は、最重要項目だからだ。だがしかし、「易しく釣る」と「へら釣りは易しい」はイコールではないのだ。

「せっかくへら釣りの敷居をまたごうと思った者を躊躇させる発言だ!」というお叱りは覚悟の上で、敢えてもう一度言う。

「へら鮒釣りは難しい」のだ。

この難しさこそが面白さ・奥深さに通じるのであり、誰にでも本当に簡単に釣れるような薄っぺらい釣りだったなら、これほど多くのファンを得ることはなかったろうし、やってもやっても達成感を味わうことが出来ない里にとっては、「へら釣りが易しい」だなんて「何ごとか!」とさえ感じるのだ。

当然だが、里は「易しく釣る」ことは全く否定していない。

「難しいへら釣りをいかにシンプルに組み立てていけるか」が、トーナメント達の永遠のテーマであるし、なんちゃってトーナメントの里の頭の中もこればかり。ただここで問題になってくるのは、「知らないで通過している領域がある」と「シンプル」は大きく違うということなのだ。

しかし知識ばかり増えて空回りする危険性を考えれば、「知らない方が幸せ」ということもあるのかもしれない。…だが。

「道」を追求する者ならば、見ないフリはいただけないのではないか。

あなたがさらなるステップアップを目指す時、難しさを直視せずに逃げることは出来ない筈なのだ。

さて、今月の江成の記事である。明日の釣りに即・役に立つというものではない。

ここから先を読む読まないは全くの自由だが、「よし、読もう」と思ったあなたに告ぐ。

「江成の情熱を読め!」

文中、江成自ら何度も読み返していると言っているように、前回のゼミの再読必須。(持っていない方はバックナンバーどうぞ♡) 11月中にすでに2004年の納竿を終えた江成だが、釣りへの情熱は一線級のトーナメントにも負けはしない。釣り場から離れていても、江成は熱い。そんな意味を込めての「on Mac」(つまりパソコン上、ということね)である。…ところでアニキ、里が出した注目の「ベレ底」・「長ハリスの底釣り」については、まだ先ですね?

by 里ちん

ハイ・テンション?

八景島シーバラダイスの巨大水槽を見ながら僕が感じたのは、「アタリなんて出るのだからか?」というものだった。無意識に長辛いつぱいの底釣りに見立て、泳ぎ回る魚達にもみくちゃにされる道糸を想像したのだ。が、「アタリが出ない」という事になってしまおうとそれまでの釣りが幻になってしまおう。魚も糸にはそうそう触れないかもしれないし、へらウキの性能のおかげかもしれないが、とりあえず「アタリは出る」という事にしておいた。

帰宅後も水槽が頭から離れず、原稿を放っぼらかして考えたが、辿り着いたのは「テンションがなければアタリは出ない」という当たり前の結論。しかし、イマイチ納得がいかない。というのも、僕の底釣りが根底から覆ってしまおう可能性に気付いてしまったからだ。ズラシの重要性を力説する北城理論を紹介して以降、僕はトントン近辺のタナ設定をほとんどやらなくなっていた。「トントンでは釣れる気がしない」ほどに心酔してしまっていたからだが、八景島の魚達は「トントンも悪くないよ」と教えてくれているような気がした。仮に「魚は糸が見えていて、そうそう触れない」としても、水流は必ず起こる。間接か直接かという違いだけで、糸がもみくちゃにされるケースがあるのは否定出来ない。であるならば、アタリの伝達に必要なテンションというものには非常に脆いと言える。そんな状態で、たるむ可能性のある余分な道糸をくれてやる(ズらす)というのは危険なのではないか。テンションがなければアタリは伝わらないのだ。次回の底釣りは絶対にトントンだ! いやしかし…。もって考えていたかったが、時間がなかつた。イライラしながら僕は、とりあえず先月号の原稿に取りかかった。

ケース・バイ・ケース?

自分で書いた二年前の底釣りゼミを読み返してみた。すると、全て頭に入っていたつもりだったが、忘れていたこともたくさんあった。まず、先ほど使った「洗脳」という言葉は訂正しなければならない。氏はトントンを全く否定していない。当然ながら、タナ設定はケースバイケースで変わる筈のものであり、僕が勝手に偏った北城理論を実践しているだけだった。

氏が力説した多めのズラシ。その根底にあるのは「へらの都合を最優先」という事だった。ズラシの効果は幾つか挙げたが、その中で「ズらすことでウキの戻りを助ける結果、ウキがバランス状態に近くなり抵抗が減る」というのがある。これを「抵抗が減った結果、カラも減る」という捉え方で済ませてしまっているのは、北城理論の核心に触れる事は出来ていない。このままではオマケである。もう一步踏み込んで、「抵抗が減った結果、アタれるへらが現れる可能性がある」という認識こそが、魚の気持ちを考えて証なのだ。

二年前のゼミ最終回で僕は、当たり前だが「ズラシで変わるのはハリスの角度しかない」と結論付けている。さらに、こんな単純なことを僕は「キモだったりして?」などと締めくくっているのだが、実はこの続きの話がある。脱稿後に氏のチェックが入ったのだが、その際に氏はえらく誉めてくれたのだ。「うん、それしかないよ。やっぱり。なんだかんだ言ったって、ハリスが横に寝ている方が食べやすいに決まってるもん」

氏のこの言葉によって、僕は自信を持って原稿を送り出すことが出来た。あまりにもハツキリと耳に残っているのでわざわざそのままと掲載したが、前回のゼミを読んでいない人



には誤解を招きそうなのでひとつ注意を。氏の「ハリスが横に寝ている」というセリフは、いわゆる「ベタ」ではない。「当然」底からは離れ、ナナメにテンションがかかった状態を指す。そう、テンションを保持するための「沖打ち」が、氏のズラシにはセットでついてまわるのだ。

読み終えた直後、ハツと我にかえった。いくらなんでも八景島での僕が、「沖打ちによるテンション」を忘れていたわけではない。圧倒的な魚量の前では人為的なテンションな

ど何の役にも立たないかもしれない可能性に、僕は震えてしまったのだ。僕の今までの経験を踏まえれば、これは残念ながら可能性ではなく事実だと思う。ただそんな状況下では、魚に蹴飛ばされる方向によってナジミがころころ変わるトントン近辺の設定よりは、大きくズラしてしまっただ方がナジミは一定するため、釣りのリズムは作りやすいだろう。これは北城理論でもなんでもなく昔からあるセオリー。だがトントン派だった以前の僕は、こういう時にも全くズラさず、しっかりとアタリには何でも手を出すイケイケだった。

北城氏に言わせれば、「やる気マンマンのへらばっかりだったら、タナなんて何だっていいんじゃない?」ということになるのだが、常に「圧倒的な量のへら」やる気マンマンではないということを見落としてはならない。「食うへらばかり」という前提であれば、へらの気持ちを考える必要は全くないのは当たり前だが、そんなわけではない。もしそうであれば、管理釣り場は誰でもイレバクになってしまう苦だが、実際そうはいかない。寄せ過ぎない方がいいとは良く言われるが、食うへらばかりが寄る訳でもない。

と、僕の中の葛藤をズラズラと書き出してみたわけだが、どうしても「結局どっちなのか」という気持ちを抑えることが出来ない。「ケースバイケース」という言葉では納得したくないようなのだ。「いつもいつも魚だらけってわけじゃないし、そこそこの寄りならズラして何の問題もないわけだ…」

どうやら、やはりズラす方向をメインに据えたい自分に気付いた。「ならば安心して突き進むための論拠を探し出せばいいじゃないか!」

たとえ強引だと言われても構わない。信じられないものに自分を賭けるなど、僕には出来ないからだ。

ゆるやかなテンション。

もう一度、前回のゼミを読み返してみた。と、さっきは特に意識せずにスルーしてしまっていたある言葉に気が付いた。それは、「ゆるやかなテンション」だった。

北城氏がイメージするテンションは、ピンと張り詰めた状態ではない。そういう状態では抵抗が大きいと考えているのだ。そのためスラし、ハリスに角度を付けてやる。すると、どんなに沖打ちによるテンションをかけたとしても、重力によってハリスはたわむ。

前回、僕は「ズラシの語感」を取り上げ、アタリが出ないマイナスイメージがあると書いたが、「テンション」に対しても注意を書き添えなければならなかったようだ。北城理論を紹介し自ら実践しているつもりで僕であっても、つい「テンション」に張り詰めた状態をイメージしてしまっているとは…。一度出来上がったしまった言葉の意味やイメージは、かなり根が深いものなのかもしれない。

ここで、前回の原稿に漏れた取材メモの中から、今の僕にとって興味深いエピソードを見つけたので紹介したい。当時を思い出したので、会話形式で書いてみる。

「北城さん、この前チャカ段底つてのを初めてやってみたんですよ。そしたら想像以上に動きがハッキリと出たんで、びっくりしましたねえ」

「どの位水深でやったのかは知らないけど、道糸をキチンと張ることが出来ない苦悩なのに、何故動き(力)が伝わるのかって事かな?」

「そうですね。片方を引けばもう一方も動くのは当たり前でしょ?」

「はあ…」

「今度、適当なヒモで実験してみるといいよ。極端な事を言えばUの字だつて動くから」

取材の後、僕は実験しなかった。当時はあまり大事だとは感じなかったために記事にもしなかった訳だが、先日遅ればせながら実験してみたところ、「氏が言いたかったことはコシだったのではないかと、僕なりにひとつの仮説を導き出すことが出来た。が、次から書くことは氏に一切断つていない。全く僕の創作ということになる。ので、内容に関するクレームを間違つても氏にぶつけないように注意していただきたい。

まず、全長50cmほどの毛糸を用意し、テールの上にUの字に置く。何かのヒントになればいいという期待を込めて、そつと片方の端を引いてみた。

すると予想通りにもう片方の端は全く動かず、すぐに馬鹿馬鹿しくなってきた。しかし、確かに氏は「Uの字でも動く」と言っていた。では、どうすれば動くのか。まっすぐ置けばいい…? いや、真面目に考えよう。Uの字の頂点(カーブ)に丸い灰皿を置き、滑車のように支点を作ってみる。当然、動く。次に灰皿をどけ、素の状態でやや強目に引っ張ってみた。支点を失ったカーブは、引っ張られた方向にショートカットされるだけで、もう片方の端は動かない筈である。しかし結果は、Uの字の頂点方向に若干だが引かれていた。力は伝わったのだ。

これはなぜかと知識のない頭をフル回転させて必死に考えてみた。

そして、「支点がない」というのは厳密に言えば間違いなのではないかと感じたのだ。

灰皿のように目に見える支点はなくとも、重力によってテールとの摩擦はあるし、物体にはそこにあり続けようとする慣性がある。これが小さな支点の役割を果たしているのでは

はないか。と、ここで気付いた。

理屈はともかく、これは水中でも同じだろう。水の抵抗はテールの摩擦と同じ役割を果たすはずだから!

今まで「チャカチョーテン」に対する僕のイメージは、どちらかといえば色物的な、いや、もうちょっとマシな言葉で言うといレギュラー的なイメージを抱いていた。

仕掛けをピンと張るだけのオモリ量を背負わないウキを用いるこの釣りは、キチンとしたアタリやサワリを伝えられる筈がないと考えられるためであった。実際、明らかに食いつ走りと考えるアタリは多いため、向こうアワセの底釣りになるケースも多い。勢い良くアワセようものならハリスが何本あったところで足りないくらいだ。そのため、それを微妙な動きの底釣りに適用するなんて考えられないと感じていたが、実はその底釣りでしか釣れないケースも経験しているし、「納得いかないが、結構動きは出るもんだ」という認識もあったのだ。

ここではチャカウキを用いた底釣りが有効になるケースがあるのはなぜかという考察は先送りにして、僕が長らく疑問に感じてきた「アタリやサワリをキチンと伝えられるだけのテンションが保持されているのか」という点を考えてみたい。

先程の実験結果から、Uの字でも動きが伝わる可能性は見た。しかも水中ではUの字ではなく、糸のクセやサフケによってピンと張っていないとしても直線に近い…ここでふと気になって、毛糸をまっすぐに置いてみた。

さっきはアホらしくて試さず、ここであらためてやってみるとやはり動くのだが、果たしてこれを「当然」と片付けていいものなのか。まっすぐ置いた「つもり」の毛糸も、顔を近づけてよく見れば直線とは言い難い。これはつまり「小さなカーブの連続」と言えるのだ。以上から、セッティング面を見た場合

「チャカウキでも十分に動きは伝わる」可能性は否定出来ないということになった。前回のゼミでは「ゆるやかなテンション」に対し常にハリスをイメージして書いていたが、道糸にも適用できる、と僕は認識を改めなければならぬ。



テンションの連続性。

Uの字の実験の際、僕は強めの力で引いた。これを疑問に感じる読者は多いと思う。僕もそう感じた。

強いアタリもないわけではないが、へらウキの感度に抛るところが大きいかもしれないし、へらの吸い込む力が実際にどの程度のものなのか分からないからだ。しかしこれは、あくまでも極端な例としてのUの字なのであ

って、実際に釣りをしているところまでのカーブはない。Rが大きくなればなるほど直線に近くなり、力が小さくても伝わるといふ理解でいいと思う。「普通に」釣りをしていれば「特にテンションを意識しなくても動きはちゃんと出る」という理解。八景島の水槽がやっと頭から離れそうだ…。

だが待て。本当か？

僕は前回のゼミで、「以前の僕は、ズラして竿を送り、ハリスを必要以上にたるませていたため、スレアタリのように大きな動きしか伝わらなかったのだ」と書いた。

これは今でも間違っているとは思えない。しかし、その時のハリスがUの字ほどにたるんでいたとも思えず、たった今導きだした結論と辻褃が合わない。となると、特にテンションを意識しなくてもいいのは「道糸だけ」なのか…さんざん考えて損じたような、なんだからとても冴えない気分になった。だが、所詮僕の頭で考えられることといったら、こんなレベルだ。これ以上は時間の無駄だと感じ、しばらく考えないでおくことにした。

数日後、またしても前回のゼミを読み返してみた。これで三度目。今度は「くの字」と

いう言葉が目にとまる。これは仕掛けの中に存在する「折れ」を指す言葉であり、動きの伝達を妨げる要因として紹介されている。北城氏は「くの字を減らす（少なくとも小さくする）工夫が動きを増やす」と説明しており、今回の僕が多用している「Uの字」と非常に近い。しかし全く一緒ではないと感じた。「カーブ」は「折れ」ではない。「テンションの連続性」に差があると思えたからだ。

底釣りをしていれば必ずある「くの字」。それが、オモリ部分だ。仮に状況に応じた常識的なサイズのウキをチョイスしているとした



釣番付

料金表

50名まで	55,000円
51名～75名	60,000円
76名～100名	65,000円
101名～125名	70,000円
126名～150名	75,000円
151名～175名	80,000円
176名～200名	85,000円

- ・仕上がりは黒一色です
- ・人数は成績表部分のみ数えます

書体見本

- 1.ぐりへの釣会
- 2.ぐりへの釣会
- 3.ぐりへら釣会

- ・番付をインターネットで公開できます(無料)

お問い合わせご注文はお早めに!

取扱店: 柴舟 03-3613-2727

ウキや小物の銘入れに 転写シール

初回注文黒一色、300銘で8,500円～
2回目以降同じものをご注文の場合
は3,500円～

- ・8書体、8色を御用意しています
- ・角印も作れます

取扱店:

- 柴舟 (東京都江戸川区)
03-3613-2727
- 佐伯釣具店 (神奈川県川崎市)
044-911-3722
- SANSUI川づり館 (東京都渋谷区)
03-3499-5025
- フィッシング中原 (神奈川県川崎市)
044-711-8266
- 鮒仙人 (神奈川県川崎市)
044-287-7470

お問い合わせ、ご注文は各取扱店
または下記HPまでどうぞ

office27
あとりえぐり

http://www.office27.com
E-mail:info@office27.com

オモリ3つ

ら、ウキからオモリまでの道糸の張りは間違
いなく確保されているだろう。では、この時
ハリスはどうか。オモリという一端は確定し
ていても、もう一端であるハリスの先端の状
態が不確定なため、沖打ちやトントン近辺の
設定などで、やはり「意識」しないとテンシ
ョンはかからないのだ。これは「オモリを境
にしてテンションの強弱に差がある」と言い
換えられる。全く当たり前である。

しかし、動きの伝達にとってはどうなのか。
理科は得意でないため僕には良く分からない
が、「テンションの強弱の差」は、「折れ」や
「カーブ」と同じように動きの伝達を妨げるブ
レーキやクッションに成り得るのではないか、
と感じるのだ。

で、チャカウキを用いた底釣り。オモリ量
が極端に少ないチャカウキでは道糸を張る力
が弱いため、オモリを境にしてのテンション
の強弱の差が小さい。また、少ないオモリは
簡単にエサのある方向へ引つ張られるため、
「くの字」も小さい。もうお分かりいただけ
ると思うがチャカウキを用いた底釣りは、ハリ
スの先端まで含めて一本のライン、一本の道
糸(ハリス)に限りなく近いため、テンシ
ョンの連続性が高いと言えるのだ。
...これでやっと安心して眠ることが出来る。

テンションが小さいながらも、その小ささ
故に新たな伝達性を持つていた「チャカ底」
だが勿論、いつでも効くかといえ、それは
違う。万能ではないのだ。

例えば超・長竿の底釣りに用いるとしたら、
効果を発揮出来ないケースの方が多いのでは
ないか。オモリに引つ張られない方が「エサ
が持つ」とは言え、ナジミ切るまでに時間が
かかり過ぎては、いくらなんでもエサが難し
くなってしまふ。無用な上ズリも招きかねな
い。もちろん、手返しの面から見てもマイナ
スと言える。

12月号のディーブサイドアングルで、岡田
清氏は自身の長ハリスの底釣りについてこ
う言っている。

「宙釣りの底釣りではなく、まず地へたありき。
早いアタリは宙から追ってくるのではなく、
より早く反応したやる気のある底のへらが、
ジワリと浮上してエサにとびつく、というイ
メージ」

宙のへらを上から追わせるといつつもりは
全くないとも言っている。あくまでも底に居

着いているへらがターゲットであって、「ジワ
リと浮上して...」というのは、それでも出る
早いアタリを表現する、とてもいい言葉だと
思う。

僕的には「底いらへん釣り」と位置付けた
この釣りを、岡田氏はきっぱり底釣りだと言
い切っているのだ。これは北城氏も同じ見解。
だが両者ともに、「宙のへらを追わせるとい
う要素」が全く必要ないとは言っていない。
ただ、「底にいるへらを狙うのが底釣り」とい
う北城氏の言葉を思い出せば、食った場所が
底というだけでは厳密には底釣りと言えない
のかも知れないが、本当に宙のへらが追って
食ったかどうかまで見える訳じゃなし、とり
あえず底釣りの仲間には入れておこう。岡田
氏も「自分はそういう釣りはやらない」とは
言っているが、「底釣りではない」とまでは言
っていないのだ。

近年は長竿いっばいの底釣りができる釣り
場が多いが、一巻きの量に違いこそあれ、多
くの釣り人の仕掛けのオモリは2点付けであ
る。僕が子供の頃は3点〜4点付けというの
は珍しくなかったと記憶しているが、傾向と
しては間違いなくウキは小さくなってきてい
る。これには様々な要因があると思うが、思
い付くものをざっと挙げてみたい。

まず、糸の強度が上がって細く出来るよう
になった結果、より軽いオモリで張れるよう
になったこと。

次に、学習の進んだへらに対しては出来る
だけオモリ抵抗を減らしたいということ。パ
ランス状態にあるウキとオモリでも、質量の
大きいオモリの慣性は強いからだ。

さらに、管理釣り場にメインステイジが移
行し、ジャミ対策が必要ないこと。また野釣
りであってもジャミ対策はほとんど必要なく
なったこと...など。

では現在、3点〜4点付けは全く釣りにな
らないだろうか?

「底にいるへらを狙う釣り」に「上から追わ
せる要素」が全く要らないケースを想定した
場合、いくらオモリが大きくてもいいはずだ。
それなら、チャカ底とは対極に位置するこの
セッティングも検証しておかなければならな
いのではないか?

以下、次号に続く...

へら鮎

Monthly fishing magazine herabuna

へら鮎釣りは、最高のゲームフッキングだ...!!



40th Anniversary Year 40th Anniversary Year

こだわりの店「黒べゑ」が贈る、毎年恒例読者還元！
新春お年玉プレゼント

さらに4釣り場追加でますます充実！
管理釣り場割引クーポン券

へら師の思い、受け止めます。

鍋で炊き、しっかりと練ってつくる「特撰わらび彩」は、少々、手間のかかるくわせエサなのかもしれません。

しかし、わらびウドンが断然強い釣況も、

しばしばあることを考えれば、

手間をかけて仕上げる価値は、十分にあるはずで

しかも、「彩」なら、

吸い込みやすい軽さ・軟らかさと、

ハリから抜けにくいコシ・ねばりを兼ね備えた、

理想的なわらびウドンに。

透明感があり、ぶるぶると震えるような質感といい、

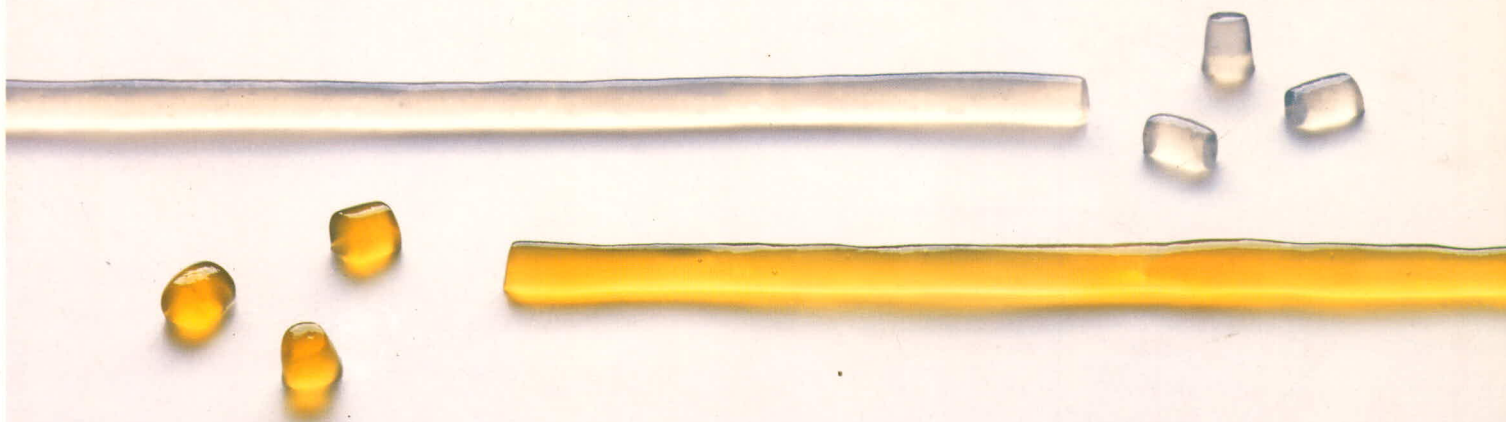
食い渋るへら鮒を誘い、

違和感なく吸い込ませることのできる特性といい、

仕上りの面でも、釣果の面でも、

あなたの込めた思いに、

「彩」ならきっと、応えてくれるはずで



「特選わらび彩」を使いこなすためのヒント。

- ①もっと、ねばりが欲しいときは…
鍋で炊いている途中で、よく練ること。練るタイミングは「彩」が半分白く濁り、固まり始めたとき。ここで鍋をコンロから下ろし、濡れたタオルの上に置いて、よく練ります。へらを持ち上げて、約20～30cm糸を引くようになればOK。
- ②気泡が入るのを、最低限に抑えるには…
「彩」を練るときは、必ず鍋をコンロから下ろし、「彩」がぶくぶくと煮えるのが収まってから練ること。また、練る際には、へらを大きく動かさず、小さく、円を描くようにすることも大切。

●特選わらび彩 分包3袋入り

こちらも、好評発売中!



コシ・ねばりとも強く、エサ持ちが抜群で、待ちが効くわらびウドン。重めなので、しっかりと食いたるアタリが出せます。

●わらびどん 分包3袋入り



わらびウドンを漬け込めば、つくりたての状態が保てる安定液。ウドンの変化や、くつきを抑えます。ウドンが黄色くなり、アビール力も高めます。

●わらび職人 200cc

丸マルキュー株式会社
〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4

お問い合わせ 本社・桶川工場:048-728-0909 大阪支店:072-824-0909
四国営業所:0877-44-0909 九州営業所:0942-82-0909
ホームページアドレス <http://www.marukyu.com/>

釣り場でエサに困ったら
iモード・ホームページ
<http://www.marukyu.com/i>

昭和41年5月4日第3種郵便物認可
第40巻第2号(毎月1回1日発行)
平成17年2月1日発行

定価 1000円 本体九五二円

